2006 年度

青年期後期の娘を持つ中年男性の対人関係形成の保持と変容についての一考察

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
近藤　千尋

わが国における中年男性は、他の世代と比較しても自分の気持ちを伝えることや弱みを見せることが非常に困難であり、抵抗を示す場合が大変多いと言われている。そして、その特質が、家庭の中での孤立を助長する一要因である可能性が高いと言えるのではないだろうか。家庭内での男性は、父、夫、個人としての立場があり、日々それは保持または変容を遂げながら営まれている。また父娘関係についても、相互の加齢に伴い変容を遂げると言える。しかし、その変容の過程において娘が父親像を持てない者が少なからず存在すると推察できる。その背景には、父親について知らないことが多すぎる、あるいは父親自身が自分の世界について話さない、または話せない環境が存在すると考えられるからである。そこで本研究では、青年期後期にある娘を持つ中年男性を対象として、男性が家庭や社会の中で持つ対人関係の特徴や語り方について研究を進めることを主題とする。

本研究では、木下康仁による M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）の分析方法を用いて個人面接による半構造化面接を行った。その結果、36 個のヴァリエーションが本研究の語りから抽出され、13 個のカテゴリーに集約された。そして、これらをさらに集約する 4 つの大カテゴリーへとまとめられた。

本研究から学生時代に育まれた友人関係の多くは「何でも話せる友人」である場合が多く、生涯に亘って中年男性における重要な意味を持つ関係性となる。その一方、この友人関係のほとんどは､加齢に伴い激減していき､現在も関係が持続している者は大変少ない。学生時代を経て職場での関係性が多くなるに連れて｢打算的な関係性｣が増大し、喜怒哀楽のどの分野においても表現を抑圧する傾向が高いことが明らかにされた。それに加え、家庭内でも表現の抑圧傾向も見られ、中年男性にとって自分自身を表現できる場が極めて少ないことが本研究から推察できるだろう。また､｢何でも話せる友人関係｣と｢打算的な関係性｣との過渡期には、必ず｢変化を見せる友人関係｣が存在し、対人関係の質を変化させるステージであることが分かった。そして、この間での対人関係をうまく保持し、育んでいくことが、その後の対人関係における質を変えるターニングポイントであり、孤独を避ける重要な課題であることが言えるのではないだろうか。

これにより中年男性にとって素の状態で感情表現を行うことは非常にハードルの高いことであると言え、これが娘や家族からみれば何を考えているのかつかめない一要因であると考えられる。そこで、自由に自分自身を出せる家庭や職場以外の第 3 の場の提供が今後、一層必要になってくるのではないだろうかと考えられる。